

ステレオタイプの測度に関する研究

中 里 浩 明

ステレオタイプ (Stereotypes) は、従来、偏見や差別との関連で考察を加えられてきた。すなわち、嫌いな対象人物群に対する強い否定的反応を含意する脈絡のなかで、取り扱われてきたと言ってよいであろう。ところが、最近、そのような感情を随伴せずして、全くの欠如のうちにも、ステレオタイプなりが、少なくともある程度は、生起しうることを示唆する見解が主張されるようになってきている。社会的認知アプローチ (social cognition approach) がそれであり、他の人々に関する情報を処理する仕方のなかから、ステレオタイプなりが直接生じるとする解釈である。ステレオタイプを持つことによって、集団所属を基準にして、多数の人々を容易に分類し範疇化でき、社会的情報の分析が単純化される。更には、人々の全般的印象や行動期待をも、それは提供してくれる、と語られる (Baron & Byrne, 1981, p. 159。なお, Hamilton, 1981 ; Miller, 1982参照)。

こうした潮流のなかに、McCauley (McCauley & Stitt, 1978 ; McCauley, Stitt & Segal, 1980) の、ステレオタイプに関する斬新な理論的かつ実証的研究が重要な位置を占める。以下の考察は、これらの研究を手掛りにして始めて可能だったステレオタイプのベイジアン・アナリシス (Bayesian analysis) であるが、その内容に触れるに先立って、ステレオタイプ研究の展開を、関連する範囲内で、若干押えておくことにしたい。

Lippmann (1922) は、まず、外部の世界と頭中の像を区別立て、ステレオタイプを、外界の過度に単純化された像であり、それを抱くことによって、外界をより理解しやすく、かつ扱いやすい形で眺めようとの個人的欲求が充たされる、しかも、それは、起源において非論理的で、新しい矛盾した情報には防衛的に抵抗してかかる、不正確なものである、と述べている。

この頭中の像、ステレオタイプに関する最初の経験的研究は、Katz & Braly (1933) によって実施された。チェック・リスト法と呼称されるその方法は、被験者に数多く (84個) の特性のリストを提示し、10種の国民や民族の個別的集団を適切に特徴づけるのに必要な諸特性を挙げさせ、次いで、それらのうちで、最も典型的な (most typical) 5つの特性をチェックするように求めるものである。そして、特性選択における被験者間の一致の程度に応じて、ステレオタイプであるか否かが決定される。だから、ここで云々されるステレオタイプは、個人的なものではなく、社会的ステレオタイプ (social stereotype) と称されるのが適当であろう。というのは、それが、多数の人々のコンセンサスによって定義される、いわば「集団測度」だからである。

チェック・リスト法は、ステレオタイプ研究方法の代表格として、Katz & Braly 以降も引き続き使用されてきている。たとえば、Karlsins, Coffman & Walters (1969) は、先駆者同様、プリンストン大学の学生を被験者として、35年間におけるステレオタイプ内容の変化や特

質を追究した。結果によると、国民や民族に対するステレオタイプには、やはり画一性 (uniformity), つまり、高次の被験者間コンセンサスのあること、しかし、ステレオタイプの内容自体には、時代の推移を反映して、激甚な変化の生じていること、が見出されたのである¹⁾。

ところで、このチェック・リスト法は、有用な方法ではあるが、ある種の「集団平均」ステレオタイプを測定しうるにすぎない。実は、ステレオタイプは個人のうちに存在するものであるが、Brigham (1971) の指摘したごとく、ステレオタイプングの「個人的な」指標が欠落しているために、ステレオタイプの習得や変容や行動への影響の詳細については、まだまだ仮説の域のままなのである。より良い測度として、Brigham 自身は、集団内確率 (within-group probability) を提示した。すなわち、特定の民族集団が当該の属性を持つパーセンテージのことで、その判断を被験者に求めるというものである。

このパーセンテージ測度は、チェック・リスト測度の量的改良を企図したものではあるが、しかし、McCauley & Stitt (1978) によれば、態度との関係づけの曖昧さや、とくに、チェック・リスト測度自体との関連の不十分さ、両者は幾分異なる内容を働いているのではないかとの疑問の故に、未だに完全な測度とは看做しがたいとされる。この点に関しては、後程論及するが、やや説得不調のきらいがなくもない。それはともかく、彼等は、こうして、ステレオタイプングの新しい「個人的な」量的測度を提唱するに到るのである。その測度は、主観確率に基づく統計理論、すなわち、ベジアン統計学 (たとえば、Phillips, 1973 参照) を活用する予測の心理学的研究 (Kahneman & Tversky, 1973) から、予期せずして出現し来ったものであるという²⁾。

ここで、McCauley (McCauley & Stitt, 1978 ; McCauley et al., 1980) に従って、ベイズの法則 (Bayes' rule) を整理しておくのが好都合であろう。

2つの事象AとBがあるとき、

$$\begin{aligned} p(B/A) &= p(B) \cdot p(A/B) / p(A) \\ &= p(B) \cdot LR \end{aligned}$$

となる。すなわち、事象Aが生起したときの事象Bの確率 (事後確率, a posteriori probability) は、Bの事前もしくはベースレート確率 (a priori or base rate probability) に、Bが生起したときのAの確率を乗じ、これを、Aの確率で除したものである。従って、確率 $p(B/A)$ は、Aの生起を考慮して変更されるBの確率ということである。

具体例を挙げよう。アメリカ人に関する特性予測で、Aをアメリカ人集団、Bを社交的なという特性とする。この場合、ベイズの法則は、 $p(\text{社交的な} / \text{アメリカ人}) = p(\text{社交的な}) \cdot p(\text{アメリカ人} / \text{社交的な}) / p(\text{アメリカ人})$, である。言い換えれば、アメリカ人のうちで社交的な者の占める割合は、全世界の人々のうちで社交的な者の占める割合に、社交的な人々のうちでアメリカ人の占める割合を掛け、これを、全世界の人々のうちでアメリカ人の占める割合で割ったものに等しいのである。

さて、 $p(A/B) / p(A)$ を LR (likelihood ratio, 尤度比) と示せば、 $p(B/A) = p(B) \cdot LR$ のごとく、Aが生起したときのBの確率は、この LR の大きさ如何によっては、Bのベースレ

ート確率と異なってくることが明瞭になる³。 LR は、別名“標徴比”(diagnostic ratio)⁴と呼ばれ、事象Aの生起が事象Bの確率を変更する程度を表わしている。 LR が1.0の場合には、Aの生起はBの確率に何らの影響も差しはさまない。つまり、Aは標徴的価値を全く有しない。

同様にして、 $p(A/B)=p(A) \cdot p(B/A)/p(B)=p(A) \cdot LR$ となる。この際は、 $p(B/A)/p(B)$ が標徴比であり、事象Bの生起が事象Aの確率を変更する程度の測度ということになる。事実は、 $p(A/B)/p(A)=p(B/A)/p(B)=LR$ となり、事象Aの確率に対する事象Bの標徴的価値は、Bの確率に対してAが持つ標徴的価値と同一である。

ところで、標徴比、たとえば、 $p(\text{社会的な}/\text{アメリカ人})/p(\text{社会的な})$ が、すなわち、ステレオタイプの測度なのである。集団所属に関する情報が、ある特徴の確率を変更する程度を表わしている。また、それは、特定の集団が世界中の他のすべての人々と異なっている程度の測度でもある。この標徴比の数値が、1.0より大または小の場合には、ステレオタイプであることを意味し、基準値からの乖離の程度が、ステレオタイプの強度を示すのである。上記の「社会的な」の例は正しくステレオタイプの的であろうし、特性を「模倣的な」に置き換えれば、これまた、逆のマイナス方向に特異な(negatively distinctive)ステレオタイプを表示することになる。

このように、ベイズの法則は、データに照らして予測を変更するための公式であり、規範的な(normative)モデルであると同時に、人間の予測行動に関する記述的な(descriptive)モデルでもある。たとえば、予測の心理学的研究において、Kahneman & Tversky (1973) は、Tom W. という人物の人格記述を被験者に提示し、いかなる大学院研究分野に所属するかというカテゴリー判断を求めたところ、ベースレートまたは事前確率は無視され、専ら、レプリゼンタティブネス・ヒューリスティック(representativeness heuristic)、ある実例との類似性によって、予測が行われていることを見出した。つまりは、先程の例で言えば、 $p(\text{アメリカ人}/\text{社会的な})$ を推定するように求められたとき、 $p(\text{社会的な}/\text{アメリカ人})$ のみが注目されたということである。この結果は、ベイズの法則に違反するものである。というのは、ベイズの法則では、カテゴリー判断には、予測式のごとく、 $p(\text{アメリカ人}) \cdot p(\text{社会的な}/\text{アメリカ人})/p(\text{社会的な})$ の、すべての要素が関与してくるはずだからである。

Kahneman & Tversky の結果、すなわち、判断事態におけるベースレート情報の無視をめぐって、その後、様々な論議が加えられてきている(たとえば、Nisbett, Borgida, Crandall & Reed, 1976)。本研究も、McCauley & Stitt (1978) に倣い、ベジアン確率の直接推定値を用いて、この問題に接触していこうとするものである。また、前述したごとく、ステレオタイプもしくはステレオタイピングの測度としての、ベジアン標徴比のインプリケーション、とくに、チェック・リスト測度や集団内パーセンテージ測度との関連、それらに対するベジアン確率測度の有効性を、検討していこうとするものである。以上の2つが、ささやかな研究目的である。

方 法

被験者

神戸女学院大学の心理学に関する基礎的演習を履修している学生40名の参加を得て、調査研究を実施した。ごく普通のナイーブな女子大生であった。

刺激材料

ナショナル・ステレオタイプの刺激対象として、手始めに、アメリカ人 (Americans)⁵を選定した。文献的にも、また馴染みの点からも、適当だと判断したためである。次に、アメリカ人の社会的ステレオタイプから、適切な人格特性を選び出す作業に取り掛かった。原谷 (1971) の大学生標本では、「社交的」、「物質主義的」、「個人主義的」、「金持ちの」という順に、アメリカ人的な特性が挙がっている。また、Karlins et al. (1969) の大学生標本では、「物質主義的」、「野心的」、「快楽を愛する」の順に、最も典型的とされるアメリカ人集団の人格特性が並んでいる。更に、ステレオタイプ記述の基本構造を、多次元尺度解析法を適用して解明しようとした、Jones & Ashmore (1973) の成果をも考慮に入れなければならない。いや寧ろ、ステレオタイプを測定しようというわけだから、そこで明らかにされた特性記述の諸次元を代表する形容詞を、積極的に選択していくべきでもあろうか。筆者の管見からしては、本邦に、この種の研究が認められない以上、彼等の発見結果を下敷きにせざるを得ないと思われた。そういう次第で、まず、アメリカ人の社会的ステレオタイプ特性を、「2次元布置」(Jones & Ashmore, 1973, P.435) のなかから選び、そのあとで、未だ表現されていない次元特性を埋めていくという手順を取った。こうして、「物質主義的な」(materialistic)、「野心的な」(ambitious)、「個人主義的な」(individualistic)、「競争的な」(competitive)、「社交的な」(sociable) という5個のステレオタイプ特性と、「芸術的な」(artistic)、「感情的な」(quick tempered)、「規律正しい」(methodical)、「迷信的な」(superstitious)、「模倣的な」(imitative) という、非アメリカ的な社会的ステレオタイプだと思われた5個の特性を選び出し、都合10個の形容詞記述をABC順に配列したのである。

そして、各々の特性（たとえば、社交的な）に対して、被験者個人に、次に示すペイジアン統計学における3種の確率を推定するように求めた。すなわち、(1)「全世界の人々のうちで、社交的な者の占める割合は」、 p （特性）であり、これは、事前確率もしくはベースレートと呼ばれる。(2)「社交的な人々のうちで、アメリカ人の占める割合は」、 p （アメリカ人／特性）であり、これは、時として、レプリゼンタティブネスと呼ばれる。(3)「アメリカ人のうちで、社交的な者の占める割合は」、 p （特性／アメリカ人）であり、これは、事後確率と呼ばれる。これらに加えて、(4)「全世界の人々のうちで、アメリカ人の占める割合は」、 p （アメリカ人）を含め、併せて4つの確率をパーセントで記すように、被験者に求めたのである。しかも、それぞれの確率推定は、ページを異にして行って貰った。最後に、(5)「次の10の特性を、アメリカ人に典型的だと思われる順にランク付けして下さい（1位から10位まで）」と称して、確率推定と同一刺激特性の順位づけをして貰った。この指標は、Katz & Braly (1933) 以来

のチェック・リスト法を代用するものである。

手続

質問紙は、表紙を含め、確率推定と順位づけの計 6 ページから構成されていた。そして、いわゆる順序効果を減殺するために、ページの配列を系統的に異なるようにして、被験者に質問紙を手渡した。半分の被験者には、順序づけ用紙が最初に、残りの半分には最後に来るように綴じた。また、確率推定の用紙に関しても、 p (特性) と p (アメリカ人／特性) と p (特性／アメリカ人) が、 $\frac{1}{3}$ 回ずつ、先頭・中間・後方になるように考慮した。 p (アメリカ人) の判断は、確率推定のうちでは、一貫して最後にやって貰った。

被験者への教示は、表紙に文章で記しておいたが、調査研究実施のはじめに口頭でも行った。「計量的予測」に関するものであると目的を述べたのち、幾つかの質問が以下に続いているが、なかには、正確に答えることのできにくいものも含まれている、それは、たとえば、「日本人のうちで宗教的な者の占める割合は」というような類いの質問であるが、その際も、たとえ不確かであっても、大体のところを推測して回答するように、と求める説明をしたのである。全員が約10分以内に回答をしておいていた。

結 果

ベースレートとレプリゼンタティブネス

Table 1 の左端に、調査研究に実施した、アメリカ人に対するステレオタイプ特性と非ステレオタイプと思われた特性を、各々 5 個ずつ掲げる。続く 3 列 (columns) は、都合 10 個の人格特性それぞれに対する判断の平均値である。順に、 p (特性)、つまりはベースレート、 p (アメリカ人／特性)、つまりはレプリゼンタティブネス、 p (特性／アメリカ人)、つまりは特性予測であり、これは、Brigham (1971) の指標でもある。まずは、これら 3 列を問題にする。

Table 1. Mean probabilities in percentages and mean diagnostic ratio

Description	Judged p (trait)	Judged p (American/ trait)	Judged p (trait/ American)	Calculated p (trait/ American)	Diagnostic ratio
Materialistic*	57.1	37.4	54.9	111.1	1.06
Artistic	25.6	25.3	25.7	37.2	1.00
Quick Tempered	50.8	36.5	53.6	106.6	1.06
Methodical	37.0	18.0	30.4	38.3	.82
Individualistic*	46.8	40.7	56.4	109.5	1.20
Competitive*	44.0	36.4	49.4	92.1	1.12
Superstitious	33.1	18.6	27.7	35.4	.83
Imitative	43.0	15.3	24.4	37.8	.57
Sociable*	46.8	50.6	67.6	136.1	1.44
Ambitious*	38.9	44.4	53.4	99.3	1.37

Note. The mean p (American) calculated across all 40 female subjects is 17.4%.

* Traits from American stereotype.

特性予測に及ぼすベースレートとレプリセンタティブネスの影響をみるために、3種のベイジアン確率推定相互間に積率相関係数を算出した。2列と3列間、すなわち、 p （アメリカ人／特性）と p （特性／アメリカ人）間の相関は、 $r=.96$ ($p<.05$, $n=10$) であった⁶。また、1列と3列間、すなわち、 p （特性）と p （特性／アメリカ人）間の相関は、 $r=.73$ ($p<.05$, $n=10$) であった。前者の高相関は、Kahneman & Tversky (1973) における類似性とカテゴリ予測同様、レプリセンタティブネスと特性予測の関連の深さを物語っている。これに対して、後者の、これまたかなり高い相関は、ベースレートと予測間にも、無視できない関連のあることを示唆している。この結果は、しかし、Kahneman & Tversky の結果とは矛盾している。彼等は、ベースレートと類似性判断間に偶然の相関が生じた場合、ベースレートと予測間にも時たま相関が見られることを指摘している。試みに、1列と3列間、すなわち、 p （特性）と p （特性／アメリカ人）間の相関を取ってみると、 $r=.53$ (ns , $n=10$) であり、比較的高い数値をみたが、有意水準には達していなかった。従って、彼等の説明は、この場合には該当しがたい。以上の結果は、ドイツ人のステレオタイプ特性を扱った McCauley & Stitt (1978) と、傾向を同じくするものである。

次に、 p （特性）・ p （アメリカ人／特性）／ p （アメリカ人）を、集団平均値を用いて、記述特性ごとに計算した。Table 1 の4列に示した数値が、それに相当する。なお、 p （アメリカ人）の平均値は、17.4%であった。こうして計算によって得られた予測の数値と、実際の判断による予測の数値（3列）間に、積率相関係数を算出してみると、 $r=.99$ ($p<.05$, $n=10$) となった。極めて高い相関であり、観測値と理論値（ベイジアン統計学）の合致を裏付けていると見ることができよう。ただし、4列に100%を超える数値が散見され、そのため、判断の誤りにも一応留意しなければならないであろう。

以上の分析は、いずれも集団水準におけるものである。だが、ステレオタイプの「個人的な」量的測度を、ベイジアン・アナリシスは提供する。言い換えれば、各被験者は、ベイズの法則に係わるすべての要素、その確率を推定していたのであるから、この点を吟味することも可能である。そこで、 p （アメリカ人／特性）と p （特性／アメリカ人）間の相関を、個人水準で計算してみると、その平均値は、 $r=.75$ ($p<.05$, $n=40$) であった。この数値は、集団平均の場合よりも少し低いが、傾向そのものには差異はない。同様に、 p （特性）と p （特性／アメリカ人）間では、 $r=.49$ ($p<.05$, $n=40$) という、かなりの相関が見られた。しかし、 p （アメリカ人／特性）と p （特性）間には、集団平均の場合と同じく、有意な相関は見出されなかった ($r=.28$, ns , $n=40$)。また、判断された p （特性／アメリカ人）と計算による、いわばベイジアン p （特性／アメリカ人）間には、 $r=.75$ ($p<.05$, $n=40$) の相関が認められた。いずれも、集団平均による相関結果と傾向が類似しており、ステレオタイプの予測には、レプリセンタティブネスと並んでベースレートが効果を有していた。

パーセンテージ測度と標徴比測度

Brigham (1971) は、ステレオタイプの「個人的な」指標として、「集団内確率」というパーセンテージ測度を提示していた。この測度は、各々の人格特性をアメリカ人集団が持つ割合、

Table 1 の 3 列, p (特性/アメリカ人) に相当すると考えられる。「社交的な」(67.6%), 「個人主義的な」(56.4%), 「物質主義的な」(54.9%) の順に, アメリカ人の社会的ステレオタイプが挙げられている。いずれも, ステレオタイプ特性として, 当初想定したものばかりである。続いて, 「感情的な」(53.6%) が来ていること, ならびに, 「芸術的な」(25.7%) の数値の低さに注意しておきたい。これらの結果は, McCauley & Stitt (1978) の結果とは, 傾向が幾分異なっており, 「集団内確率」というパーセンテージ測度の有効性は, 必ずしも甚だしくは損なわれていないように思われる。

Table 1 の 5 列, ここに標徴比 (diagnostic ratio) を示す。 p (特性/アメリカ人) 平均を, p (特性) 平均で除したものである。前述したごとく, この指標がステレオタイプの測度である。ステレオタイプ特性は, 平均標徴比が 1.0 以上の数値で示され, 全世界の人々よりも, アメリカ人にとって蓋然性の大きな属性であるとされる。逆に, 平均標徴比が 1.0 以下になるほど, アメリカ人にとって蓋然性の小さな, 特徴的でないというステレオタイプ属性であることを意味する。そして, 基準値 1.0 は, 非ステレオタイプ属性を表示する。そこで, 表を見ると, 「社交的な」(1.44), 「野心的な」(1.37), 「個人主義的な」(1.20) の人格特性がステレオタイプの的であり, 「模倣的な」(.57), 「規律正しい」(.82), 「迷信的な」(.83) の特性が, アメリカ人に特徴的でないというステレオタイプと出ている。集団内パーセンテージ測度と比較すれば, 「物質主義的な」(1.06), 「感情的な」(1.06), 「芸術的な」(1.00) の特性が, ステレオタイプの的ではないと, 平準化されているのが目立っている。ただし, ステレオタイプ特性の識別において, 両測度のどちらがベターかは, 俄には決定しがたいようである。

チェック・リスト測度と標徴比測度

標徴比測度がチェック・リスト測度と関連のあることは, 前述のごとく, 前者が, 後者で最も典型的とされたステレオタイプ特性を, 同じく特徴的 (distinctive) だと描き出したことから明らかである。しかし, 両者の関係, ならびに, 集団内パーセンテージ測度とチェック・リスト測度との関連を, より直接的に検討することも意味があろう。そのために, 被験者に, 先程来の 10 個の刺激特性の典型性をランク付けしておいて貰った。被験者ごとに相関係数を計算し, その平均を取ったところ, 典型性順位付けによるチェック・リスト測度と, 標徴比測度との相関は, $r = .50$ ($p < .05$, $n = 40$) であり, 他方, 集団内パーセンテージ測度との相関は, $r = .84$ ($p < .05$, $n = 40$) であった⁷。結果を見れば, 標徴比測度よりも, 寧ろパーセンテージ測度のほうが, 典型性順位付けと関連が深かったのである。

考 察

人間の予測行動 (事後確率) に対して, ベースレート (事前確率) とデータの情報性 (レプリゼンタティブネス) が持つ効果から見ていくことにしよう。アメリカ人に関する特性予測, p (特性/アメリカ人) には, ベースレート, p (特性) が, レプリゼンタティブネス, p (アメリカ人/特性) と並んで, 有意な関係を持っていた。この結果は, Kahneman & Tversky

(1973)の実施した、人格特性記述から大学院研究カテゴリーを予測させて得た結果とは異なっている。彼等の場合は、ベースレートが無視されていたからである。この相違の理由としては、特性からカテゴリー判断という方向と、今回の、カテゴリーから特性判断という方向の違いを含め、課題の内容や難易度、レプリゼンタティブネスへの近づきやすさなど、種々の要因が推測されるであろう。McCauley et al. (1980, p. 200)のごとく、「人々は、時には、データを軽視しベースレートに頼りすぎるし、また時には、ベースレートを軽視し個々の情報に頼りすぎるし、更に時には、ベイジアン規定に従って双方に注意を払うようだ」、と言えるのかもしれない。そうだとすれば、ベイジアン処理方式から、人々は、何時、何故に逸脱するのかについての検討が、稔りあるし不可欠であろう。

次に、McCauley (McCauley & Stitt, 1978; McCauley et al., 1980)の提唱した、ステレオタイプまたはステレオタイピングの、新しい「個人的な」量的測度であるベイジアン確率測度の有効性、従来からの、Katz & Braly (1933)のチェック・リスト測度やBrigham (1971)の集団内パーセンテージ測度との関連性を、総括的に考察しよう。

我々の調査結果を見ると、アメリカ人のステレオタイプ特性の出方に関して、ベイジアン標徴比測度と集団内パーセンテージ測度間には、多少の違いが認められた。しかし、それは、事前にチェック・リスト測度での典型性に従って選出した諸特性、その範囲内での変異にすぎないようであった。ただ、「感情的な」や「芸術的な」の特性が、パーセンテージ測度では、ステレオタイプ的と出ているのに対して、標徴比測度では、そうではないと平準化されている点を考量すれば、後者の測度のほうが少し適切なのではないかと推察される。もちろん、この推察は、今後の調査研究を俟たなければ、明確なものになり得ないことは言うまでもない。

順位付けチェック・リスト測度との関連づけでは、パーセンテージ測度のほうが、標徴比測度よりも、寧ろ高い相関を示していたほどであった。この点は、McCauley & Stittも同様の結果であった。彼等は、前述のごとく、パーセンテージ測度は、チェック・リスト測度と幾分異なる内容を働いているのではないかと主張していたが、チェック・リスト法の、少なくとも、刺激特性の強制的順位づけという代替法を使用した場合には、説得力をやや欠いているようである。現時点では、集団内パーセンテージ測度は、単一のステレオタイプ測度として、それ相当の測定効果を持つと言わざるを得ないであろう。

他方、標徴比測度は、チェック・リスト測度と斉合性を保ちつつも、実質的に異なった側面をも併せ持つ、量的に改良された、独自の測度であると看做することができよう。従って、ステレオタイプ集団を他から区別する新しい測度として、旧来のチェック・リスト測度にとって替る資格を、十分に有すると考えられる。確かに、この測度で、集団平均と並んで個人的なステレオタイプの有様が、明瞭な形で示されてくる点が画期的である。標徴比という指標によって、ステレオタイプの起源や獲得方法、性質や構造や変容、行動への影響などを、個人水準で探究する可能性が開かれたのである。また、蓋然性の小さな、マイナス方向に特徴的な(negatively distinctive)ステレオタイプが、標徴比測度によって容易に認め得るのも利点である。これなどは、チェック・リスト測度では、直接には知り得ないものだからである。

更に、ステレオタイプ標徴比測度は、集団所属情報に基づく確率予測として、ステレオタイプを捉えるところから出来たものであるから、他の種類の、人間の情報処理や予測行動、たとえば、帰属過程や問題解決、概念行動との関係や連繋を、同一のベイジアン測度でもって検討することも可能である。そうであればこそ、ステレオタイプの定義は、「ある種類の人々に関する一般化であり、その種類を他から区別立てるものである」(McCauley et al., 1980, p. 197)と述べられ、必ずしも、不正確さや非論理性や硬直性を有するものとしては、扱われていないのである。

さて、論議は尽きないが、本論文は、Clark McCauley に触発されて、ステレオタイプの認知過程を模索しようとしたものであり、いわば、確率予測の社会心理学的研究の、ほんの第一歩というにすぎない。今後検討すべき課題が、前途に山積しているのである。

註

1. 拒否的ステレオタイプの減少が報告されているが、変化の幾分かは、表立って偏見を認めることをよしとしない性向に帰因するものであろう (Sigall & Page, 1971)。
2. ベイジアン統計学の心理学領域への適用は、1960年代から盛んに見られ、今日までの労作としては、たとえば、Slovic & Lichtenstein (1973) を挙げることができる。邦文では、繁耕 (1976) 参照。
3. 「Aが生起したときのBの確率は、ファクター LR を掛けることによって、Bのベースレート確率と異なり変化する。言い換えれば、……Bの事後確率 (Aの生起が与えられたとき) は、 LR が1.0と異なる程度に応じて、Bの事前確率とは異なる」(McCauley, 1982)。
4. 標徴比に第2形式があり、「ミラー・イメージ・ペア」におけるステレオタイプに有益で、オッズの形をとる。たとえば、攻撃性予測における性別標徴比測度は、 p (攻撃的/男性)/ p (攻撃的/女性) と書ける (McCauley et al. 1980, p. 199)。なお、この種のベイジアン・アナリシスは、行動の原因帰属過程をめぐって、かなりよく実施されている (たとえば、Ajzen & Fishbein, 1975)。
5. ステレオタイプ研究において、アメリカ人とは、通常 white Americans を指し、Negroes とは区別されている。
6. Fisher のZ変換と無相関検定には、Glass & Stanley (1973) の計算式と付表を利用した。
7. 最も典型的な特性は最も高い順位を持つように、数値を変換した。ここでは、McCauley & Stitt (1978) に従って、積率相関係数を算出したが、順位相関扱いの別法によると、各々、 $r = .56$, $r = .83$ (いずれも、 $p < .05$, $n = 40$) となり、両法間に差異はほとんどなかった。

引用文献

- Ajzen, I., & Fishbein, M. Bayeian analysis of attribution processes. *Psychological Bulletin*, 1975, 82, 261-277.
- Baron, R. A., & Byrne, D. *Social Psychology*. 3rd ed. Boston: Allyn & Bacon, 1981.
- Brigham, J. C. Ethnic stereotypes. *Psychological Bulletin*, 1971, 76, 15-38.
- Glass, G. V., & Stanley, J. C. *Statistical Methods in Education and Psychology*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1970.
- Hamilton, D. L. (Ed.) *Cognitive Processes in Stereotyping and Intergroup Behavior*. Hillsdale, N. J.: Erlbaum, 1981.
- 原谷達夫 民族的ステレオタイプ 高木貞二 (編) 現代心理学の課題 東京大学出版会 1970 pp. 252-261.
- Jones, R. A., & Ashmore, R. D. The structure of intergroup perception: Categories and

- dimensions in views of ethnic groups and adjectives used in stereotype research. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1973, 25, 428-438.
- Kahneman, D., & Tversky, A. On the psychology of prediction. *Psychological Review*, 1973, 80, 237-251.
- Karlins, M., Coffman, T. L., & Walters, G. On the fading of social stereotypes : Studies in three generations of college students. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1969, 13, 1-16.
- Katz, D., & Braly, K. W. Racial stereotypes of one hundred college students. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 1933, 28, 280-290.
- Lippmann, W. *Public Opinion*. New York : Harcourt, Brace, 1922.
- McCauley, C. Personal communication. January 1982.
- McCauley, C., & Stitt, C. L. An individual and quantitative measure of stereotypes. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1978, 36, 929-940.
- McCauley, C., Stitt, C. L., & Segal, M. Stereotyping : From prejudice to prediction. *Psychological Bulletin*, 1980, 87, 195-208.
- Miller, A. G. (Ed.) *In the Eye of the Beholder*. New York : Praeger, 1982.
- Nisbett, R. E., Borgida, E., Crandall, R., & Reed, H. Popular induction : Information is not necessarily informative. In J. S. Carroll & J. W. Payne (Eds.), *Cognition and Social Behavior*. Hillsdale, N. J. : Erlbaum, 1976, pp. 113-133.
- Phillips, L. D. *Bayesian Statistics for Social Scientists*. London : Nelson, 1973.
- 繁榊算男 ベイス統計学の心理学的データへの適用 心理学評論, 1976, 19, 95-115.
- Sigall, H., & Page, R. Current stereotypes : A little fading, a little faking. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1971, 18, 247-255.
- Slovic, P., & Lichtenstein, S. Comparison of Bayesian and regression approaches to the study of information processing in judgment. In L. Rappoport & D. A. Summers (Eds.), *Human Judgment and Social Interaction*. New York : Holt, Rinehart & Winston, 1973, pp. 16-108.

原稿受理 1982年8月4日